



春日大宮若宮御祭禮圖



八波子
953
1



大和の西の西に才一ふとれーうらうらふ平安城小於と

後一好ひて後仁明天皇三年は勅と下一好ひて

山城西と才一とをう勢好ひーと

ちふ良 崇神天皇二十年九月は武垣安良と妻の

吾田媛と必あをわと少をんとせりは。涉門五十獲

芥彦命と大彦彦命と人とはり。輪轉川又

俗三木津川と云。戦ひ歎乃軍破りて安良更

ぬとあそり。則兵を以てふは軍兵集りはとむて

そよあをとあそり。うらうらふとそ

奈良の系と云はるふ後奈良宮よりたのし梅と

新編 元明元年 聖武孝謙 廢帝 祿正元仁

七代より 桓武天皇 西暦二年 十月二日 山城西長

園子遷す也 好ひ又 延暦十五年 十月廿一日 平安城

うつろせ好ふ

春日里と云。あうの土地を園子とて。天皇あも。初より

あうふ。昔あゆの夏もろく。あひはく。花は多く。風

系 春日日の。とくまればとて。春日の里といふ。初

是より。奥子。明神神祇向の時。月夜の詠めしがま

り。聖小勝と云ふ。うらうらふとて。此地は安良とト云は

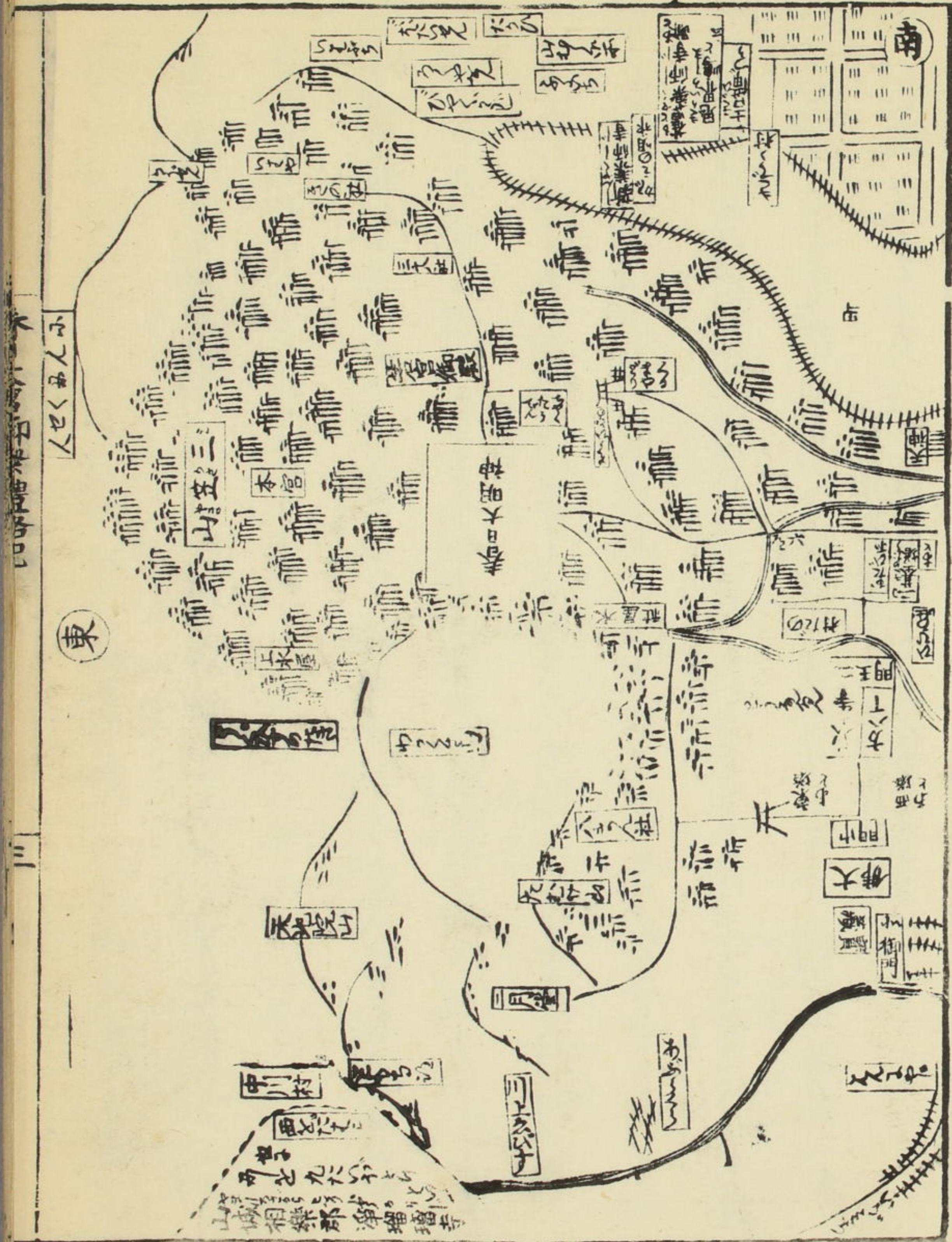
ぬ。神祇向の後。益々系よとて。大明神神祇加護事へ書

奈良の系より後下初代天皇 聖武天皇 廢帝 祿正元仁

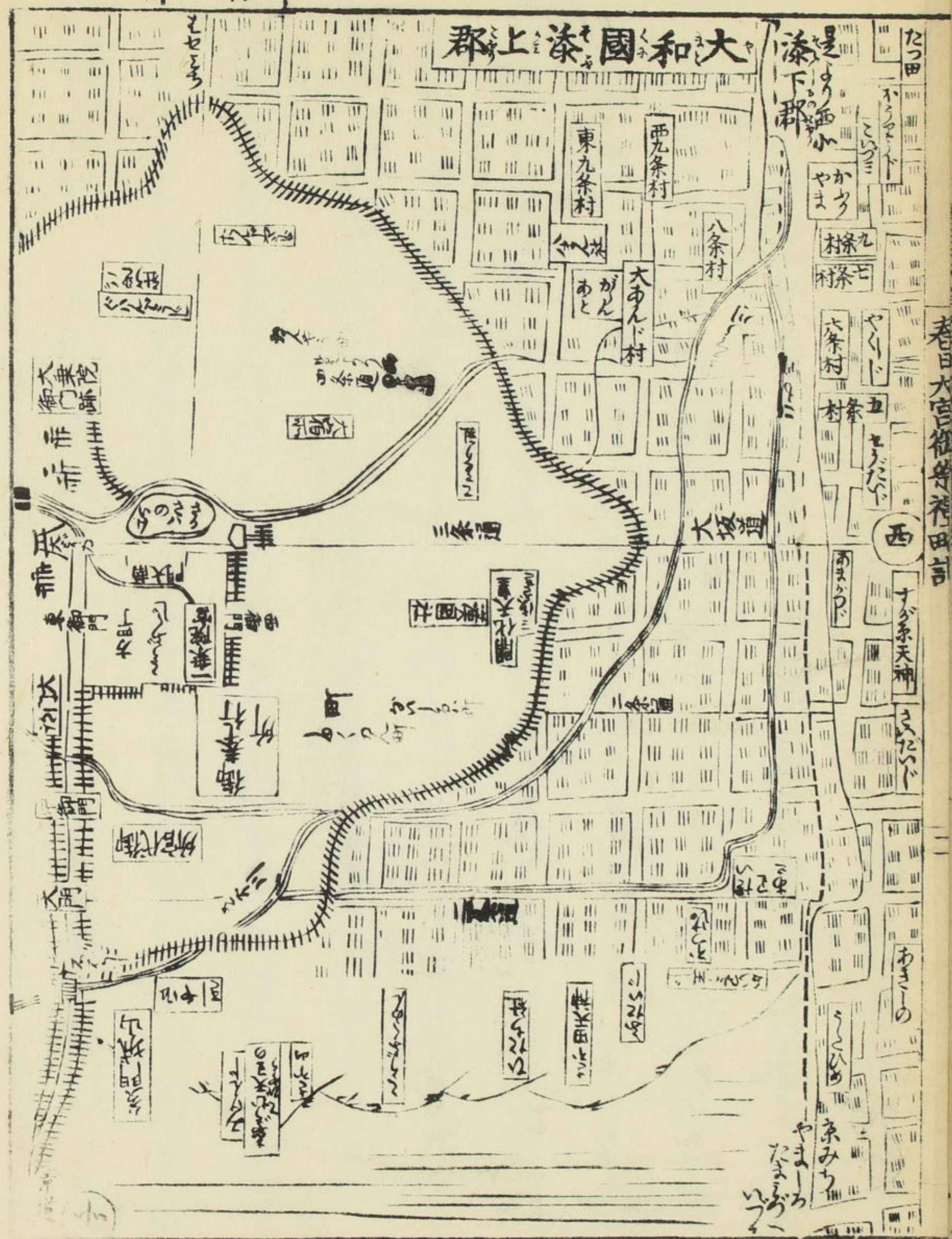
後日印記 水部は對して而別と云

たうごく かつそりのこま

地理之圖



南都之地



祀ありあり。さきへ首より。每秋郷と尸傳く春日山の
草あまて軍兵と見えて款の迹さう一よりそく支傳
りて。別卷より記しあり

南郡地志あれい只方角と記さう。善い名も記ありあり
物もた。名も記ありあり。又名のお遷。おのちい
支傳ありあり。多記し。見る人の改正とさう。別卷
ありあり

清笠山 之笠山と。春日山より。昔の住昔の名ふし。

大羽津山 羽向の後。神田の天り下と記さう。俗説多し。妻
るり。とて。清笠山と号するさう。も俗説多し。妻
ハ名も記ありあり

春日山に雲者より七時神清法座の
此三笠山と名し一説は雲者なり

又春日大明神の。一朝の右神也。鎮し四海安
寧と海をり給ふ。天津彦太皇太后也。草部中
よへ新ひ一。時。邪神少也。記ありあり。天より
と記してあれと傳し。古汝命事代主命。天照大神
を。あやぬ光なり。不。經津主 香取 武甕槌命 鹿嶋
等追討使とて。兩神さう一。時。記とねさむ。勇と
なる。古名戸と。を。ひ。とて。お合のこ。やみ。成て
し。多。万民のうれくと。や。め。給ふ。則。天照大神
屋根命子合神の。清笠山ありあり。傳。古。神。宮。也。

たすく。才四の御殿子。ゆとられたまふ。あれまうりて
御裳濯河の流。千秋のうきとうりへく。九五の位
たさやうふ。御笠山の尻。万歳の名とあまひて。博陸
のうき。たより。うの源とそらぬれむ。むく我朝。徳鬼邪
神。あまくれ。我ひて。都鄙やまうり。ざり。武甕
槌の命。是成あまれ。及て。陸奥國。塩竈浦子。あま
く。うり。給ひ。邪非。靈威子。たそれまて。海つ。月を。或々
よ。字と。うり。或は。あま。さび。たて。まう。五。そ。後。常。陸。水
跡の社より。藤。信。子。う。つ。と。と。給ひ。つ。升。子。作。續。京
を。二。年。の。春。御。笠。山。ま。う。つ。り。給ひ。て。春。の。花。成。り。と

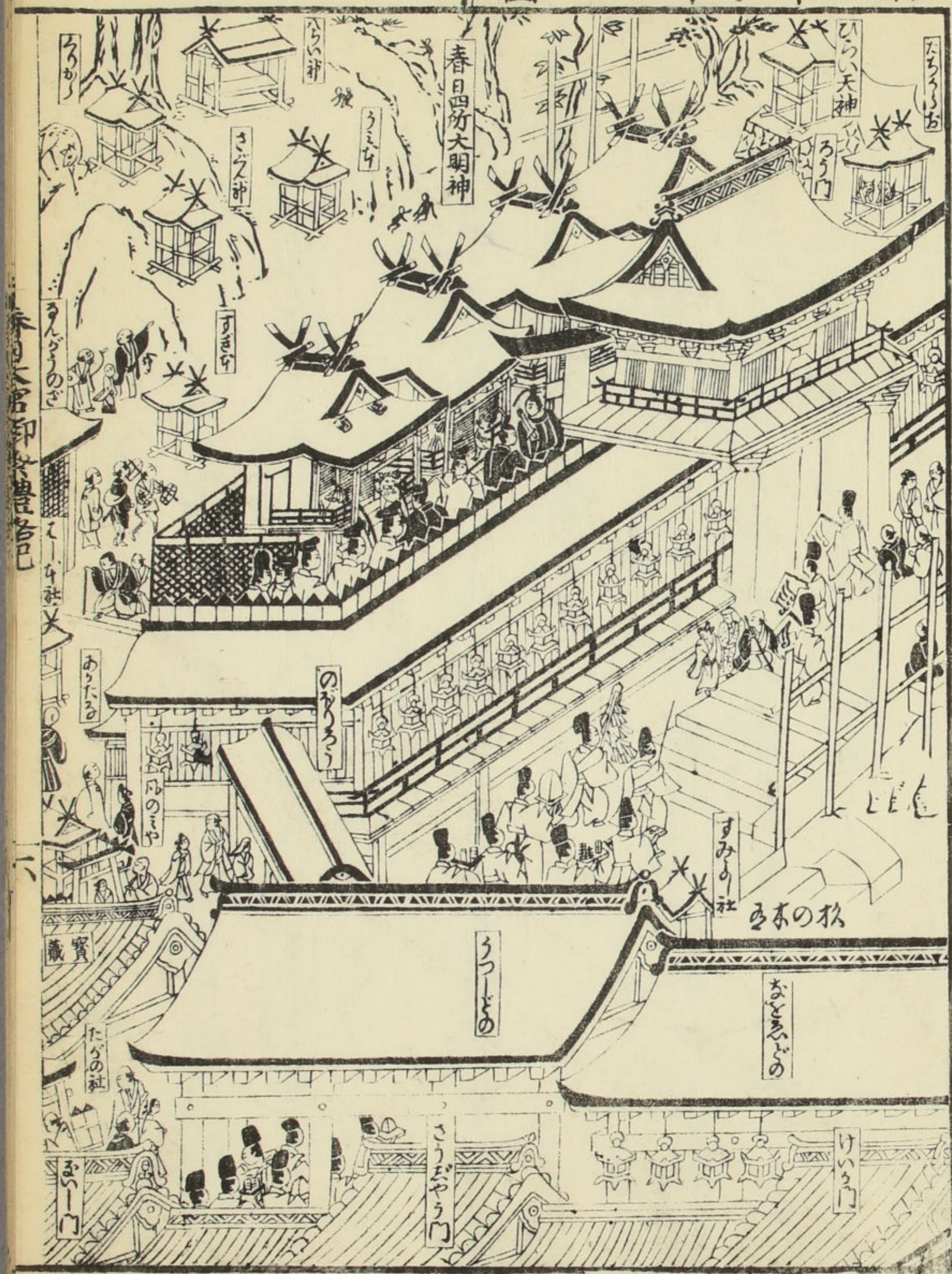
あまひ。秋。の。月。を。あま。さ。き。り。給ひ。株。津。別。の。う。ち。あ
ま。た。月。を。れ。れ。も。月。の。光。も。と。ま。ま。山。ま。さ。す。花。の。白。い。も。
春。日。野。子。勝。き。う。う。り。う。の。花。月。と。の。て。あ。ま。ひ
新。へ。と。香。取。平。屋。の。兩。神。子。申。され。し。は。た。り。と。し。れ
る。影。向。一。給。て。より。あ。乃。と。靈。驗。と。う。り。て。利。登
日。と。よ。河。と。あ。く

春日四所古御神

- 第一 涉殿
- 第二 涉殿
- 第三 涉殿

武甕槌 下総水戸藩より影向
 齋主神 下総水戸藩の明神
 天兒屋根命 中臣 河内玉手屋より

神明社の之圖



春日四所大



春日大宮権祭神殿

新向之。大津宮。天名屋小節也。給の時
名戸とち至命と。尺小園と給。而神人
女也。神又作勢の由。内宮の御神よ
弟四侍殿
毎一海す

春日宮御祭 嘉祥三年九月十四一日と授けたり給
ぬ。勅使の友原助朝臣也

幣殿又舞殿と名ありたり。春日祭の御使奉幣と
し。を給たり。而之。又陪従の神。未定。多し。奉幣と
友。舞殿と云。依。合也の殿あり

春日神威の御
ま也。附ありぬ。皇
の花。御祭人の御
ま。乃。又。指れ
あ。本。の。と。り
ま。と。り

陪従神系 天和二年 戊午十一月廿一日より七ヶ夜執

行り 長者宣り 勅使具介堂上之人 地下十

人 内藏兼二人 笛二人 各大曲 本拍子一人 末拍子一人
和琴一人 大曲 付歌二人 本長一人 舞曲あり

是は夏五月。苗山と木。枯。乃。祈。謝。人。費。毎。年。儀

直會殿又ハ講の座と云。乃。法。花。ハ。海。依。也。と。り。あり

佛八講 寛文十二年 壬子年十二月廿五日より廿六日

一乘院宮 佛依りあり 採葉汲水の儀式あり

八海屋。乃。酒。を。造。る。系。依。の。法。人。より。と。り。あり

神宮寺 神家の東の方より一宮あり。即ちく日。乃。佛。造。給。の

是。皇。後。寺。唐。法。の。依。り。あり

廻廊の西側より門三つあり南と北の門。勅使は門を入りて

中と僧正門水戸社社系 毎四月二日 有る後祓宜儀行はる

能哉云お綱やまゐるあまのくひに門の安否をうらみお勤

この神事ハ世の中ハたはたあまのまゝまゝなり神事ハあまのまゝなり

小と門竹門 俗に古くハ春日祭のまゝ門竹の系

毎日朝夕御供御進一なる社家祓宜お勤 殊に二旬 朔日十一日

五音の音系奏する外ハ臨時の御供有る人教多お勤

世人教多よりくまの有りくといふも之管 齋築 笛

世小唱お多る御供御進一なる社家祓宜お勤

神供領五千三十石余 門社家方千五百五十四石二斗余

外ニ 燈明領祓宜方千六百五十一石八斗余

毎二十一年同じ御造替料現米貳万石出ル御造替之年小

しと成る。その工匠栲皮師 鋸造。辟土造。木枕

まて。烏帽。素襦袢。お勤む。西遷宮より十八年同儀

亦一年として西遷宮の御

春日祭といは宮内御事。二月霜月申の日一と云ふ

勅使上卿 清祇人。その御供お多る。京より御供多

い祭ハ。仁明天皇。嘉祥二年九月。中臣秀基。初て奉園

經て後。清和天皇。貞觀十一年十一月九日庚申。初て祭

一とせぬぬくをまほしく登山しつちとをけつとくこれ

常陸

法性寺北かとも思通ふ海どおさあくかいー海あつ時春日乃

海ほり乃ぼくひささせ給ひしふ内約因防のご海ほり

仍事の新たかとうふりとりけり

後世迷

いり神もうれしと登山ぬくまのまつ乃。子代のくまを

けふ海成長の後あはれ清る教の余り若宮清夜あ後

のち頼と頼ー新ひーる若宮ち祭新よくわー

辰の日あり成の日まて。七ヶ日のる

辰の柳おとそ南つ水つ柳魚方より舞下段山へ入り柳

の枝とりありは殿縁酒造るまおまて柳の枝とて

回廊の西

己の日後 夕方 春祭の神主 衣冠と着し冠の中子よ本柳

四ととりけ柳ち麻よて幣殿の東の間より神前より向

了んこの本乃柳よ。あふもさうふ。信和と倫人の辰と云

壇下の西と信吉の下乃辰と云 枝を祓宜紙燭と扱て

今いまきて了んこの辰と云り

す。社家祓宜後よあか

午の清酒とて酒肴と備へて後社中祓宜以裁ま

未の饗食とて神主より職司といふ神人よ下知一の井川

ちの砂と扱てて小社の鳥居れをまてまより一守

上卿弁京都より山下向社家方より宿あり

江家治才 當日上卿先着宿院徳良和催諸司使内侍等

又相從騎馬 略 又長者殿御馬 略 申日着梨子原

梨子原在二條大路南自本府儲七間萱葺屋
屏風冷等自京郡相具之件梨子原者上古鳥
近衛府領地故也 今宿院所 梨子原所と云る
別添記

申日 大倉居の 夕方 淨神殿 淨土 同きなり

淨器と云ふ花より取わし 淨土より取わし

淨土力 五 淨針 五 淨弓矢 五 淨馬鞍池 一 是か
指垣御

内淨土力 淨洋 淨弓矢 一 宛
若宮御殿へ傳へたり

上卿 淨土向 仍列 如木二仍よ 松明と物

淨土 淨土 淨土 淨土 淨土 淨土 淨土 淨土 淨土 淨土

并日日前 供奉の随分教ふ百つまうくしひま

江家治才 略 使く來集列見過上卿率弁氏人等

参向 列見過ハ 今の二道 ちたふ字考説る男

車屋敷あり 輿よりゆか 上卿弁 東帯 任下教人の迎

人後戸社 瀬織津姫也 宿まを抄ふ 大膳職よりせんらふ葉

度あり 大膳職より 淨棚の淨信とて 足る馬木札

神あり 淨依官あり 後より 又寛箱とあふなり 式

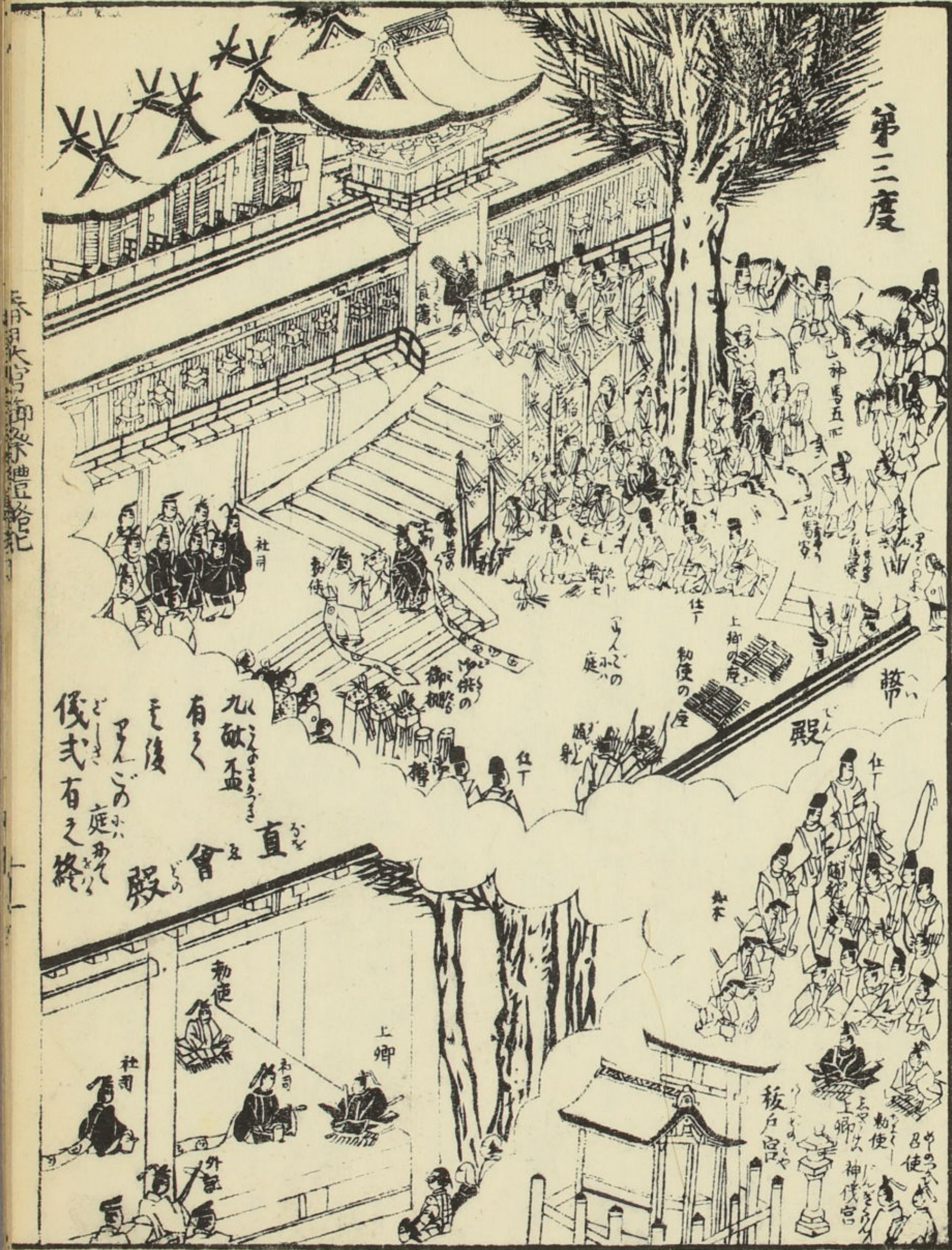
着到殿へ入るを抄ふ 上卿 東の方より 弁ハ 中屋の軒

小西へ四り 妻よりより入るを抄ふ 日西をとうく 上門の西

外記史 参りの役人着列とく 純よ入るよ

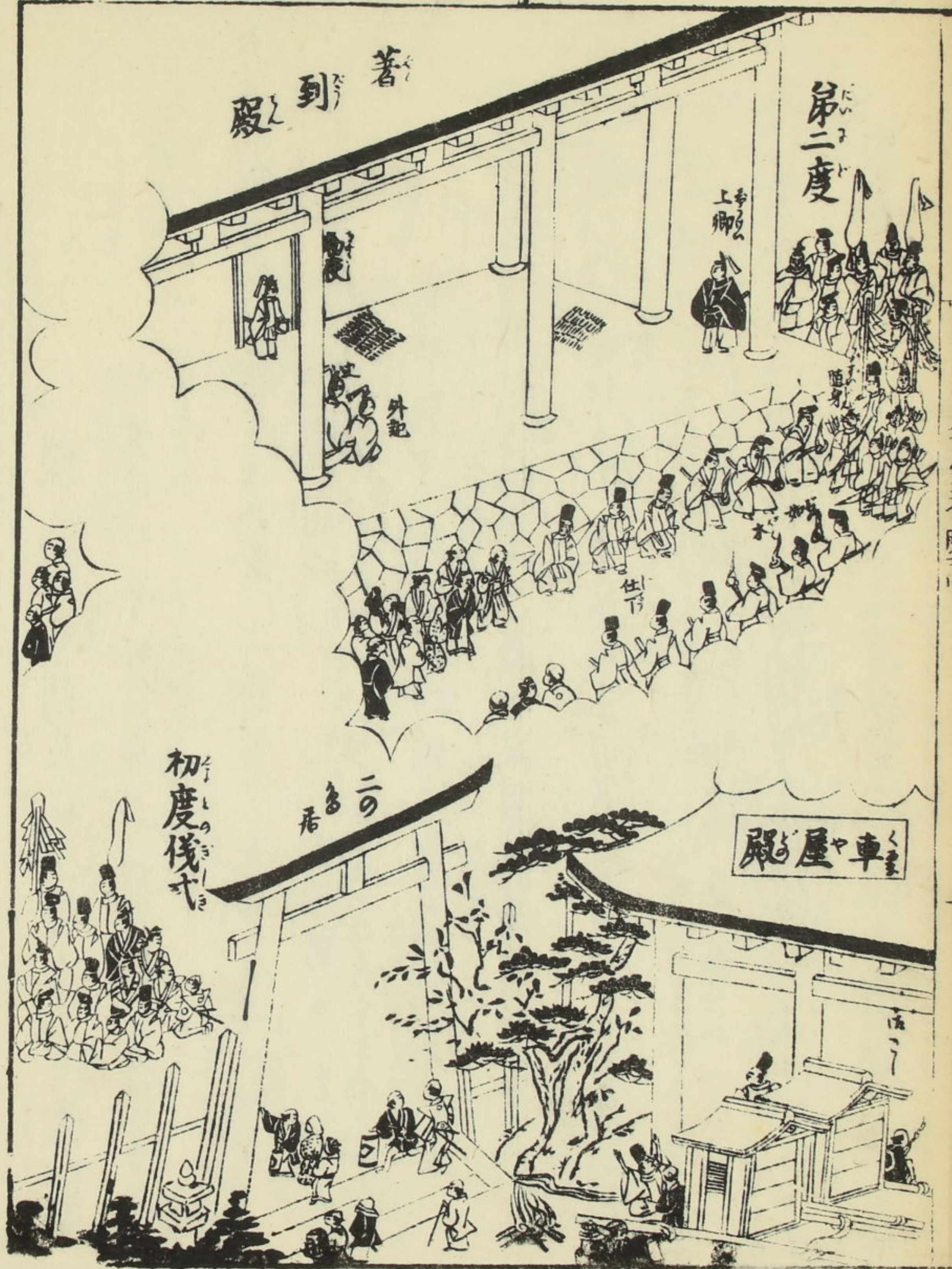
まより下、友の名居より 慶賀門より 入山川をて 女子

祭禮之圖



天照大神御下地宮記

春日大宮御



春日大宮御下地宮記

あり幣殿と直舎殿の作合めてちりと解き。動冒時たづま
直舎殿。東のつらんの庭ふ

御棚の御供 四脚 巾食薦と申す立てて西側より

棚より。御供は大膳職より。御供をいし。山の葉海
魚。柏の葉とわひ。より。柏の御供と云

御樽 ニツ。もさうつに和足付

衛士燈と庭と。東小の方。焼く 仕下東西二行。床机

神前御壇より 稲穂と申す神のふ枝と云。教多掛と云

社家氏人皆。吉社の前より。南より。向。立列と云 稲穂より村

神より。御棚の巾食薦ととりて。一御殿の神より。申す。御

上卿。弁。庭上の一御棚と。右より。棒。ひ。は時。裾と掛

神前より。御へ。奉り。庭より。御より。申す。座

上卿ハ幣殿東より。才三の間の。庭より。着。在。あり。申す。あり

弁 ハ才四の間の。庭より。着。在。あり。掃。於。祭。葉。道。と。申す。あり

才二の御棚と。才三の御棚と。は。社家。御へ。奉り

天子の御幣 上卿 奉幣より 神を清む。九神前。奉

開白の御幣 弁 奉幣より 正額。文。九神。前。奉

神前。献。玉。何。く。神。主。正。額。お。勤

古くハ内侍も。清。と。申す。を。申す。あり

御神前。或。相。海。神。主。退。き。稲。穂。の。糸。乃。本。あり

上御弁。日手をおせ好ひ。又より庭ごと退き給ふ

祓る五之。たる寮。たる寮。各人冠。とひりけ國體成

る。稻垣と引廻る。内々之。舞をるあり。右者殿ノ。此

の家。才馬寮。使率廻。清る。八回。右者殿。神馬

上御弁。又作合みて。鈕と帯。ををる。見より

直會殿着座。上マハ。東の軒下と通り。水のるより。うせ好ひ

弁ハ。面、廻り。水。この。右より。東向者座

以時常。殿の。西。末の。間。あて。たる。土器と。さき。巻。よの。せ。土器

祓る。正。額。裾と。下。土器と。祓る。奉り。清。用。ら。く。九。交。式。こ

有く。正額。内と。加。柄。枚。近年ハ。時。ふ。より。籠。子。少。用。

古くハ。上。マ。府。の。衆。人。は。修。り。て。大。和。舞。と。奏。合。ま。と。今。も

外記。史。又。杖。と。て。一。通。の。書。と。本。の。先。よ。さ。う。ま。さ。ま。て

上御。よ。捧。ま。り。上御。清。扱。見。古くハ。日。つ。け。の。系。と。冠。の

上御。弁。直。會。殿。と。初。の。と。く。退。せ。好。ひ。作。合。ま。れ。た。す。こ

庭。上。清。棚。の。け。綿。二。把。も。さ。さ。ま。の。せ。お。く

上御。ま。か。へ。ら。官。人。京。都。より。系。向。上御。の。山。肩。へ

綿。と。り。け。ま。り。上御。比。上。よ。び。ご。つ。き。清。頂。戴。わ。り。退。せ。ま。り

又。より。慶。賀。門。と。く。右。二。の。名。を。右。東。金。殿。より。水。初。興。あ。て

清。下。向。翌。朝。の。上。洛。二。条。通。り。の。女。娘。越。近年ハ。今。の。系。乃。の。り。未。女。の。記

其後社司神前子座一神器ととり下一神庫子奉納り

神庫殿の御事と奉納り
各退出を

戌の日 小祭ありとて直舎殿へ祈宜集り水酒給り

御幣并 逆矛などいふ御と少く形子作り例へて

神殿并 小社も居あてとてくまなく修へ修へ

春日大宮御祭禮七ケ日終

僅昔ハ申夜世の冠めて
神馬と奉り下部の勢よ
強きふくとり。まゝ外器とどり細きより天和年中お
了りよし。まゝ比もて古老乃神人。南より自向中
はかんさうふくと云まよりおあふ。故実ことひひまてき
江家決才は神より後著梨原解紐放警終夜醉遊狼藉及盗
人略又飯京至不眠寺く邊之間又獨盗人略
又後著狩衣指貫許飯奈良攻工度淀一度略
又於奈良後預録之後於不退寺前二作詩略
是ハ奈良後服着も別々あり又依保川の尻考のたり
平家四倍も自給よし。又老がさうり。七千人かり。後
ニテ所の乃どり切。かひも。さうりも。引てまらうり
さうりも。平家あり。二子小分つてらる向くと時
。西方寺西の頃の内。不浄の地と。さうり。永禄三度申年。松永
。彈正眉間寺山。孫誠郭と。早門山。大化の地と。西方寺。知
。依保山。眉間寺の。前。西南へ。流。と。依保川と。云。未。又。さ
。ら。川と。云。古。平。初。獨。あり。俗。況。松。永。氏。祭。の。乃。と。採。一。た
。と。非。と。う。早。く。滅。亡。と。と。

上卿辨。市上落。近年まで。池原所。と西へ西方寺。

西の頂へ入。少くを所中。又分。西へ。二系通りへら。たの右れ。

小小社あり。給る。乳母。いけ。お娘。山城。玉。あ。ら。お

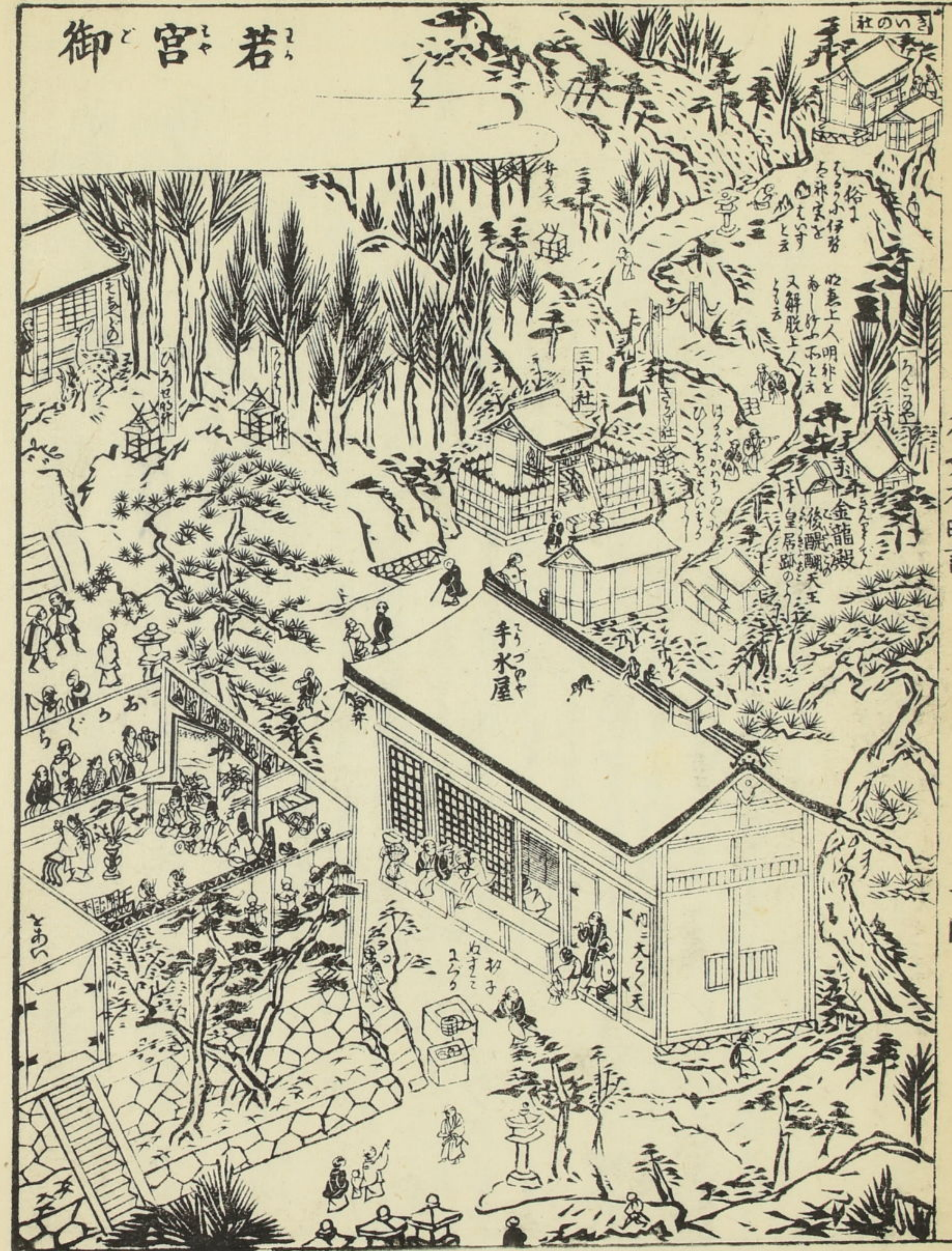
湯。御。系。右。給。る。い。け。は。つ。う。い。さ。れ。比。比。ハ。西。方。寺。の。西。小。き

江家決才は神より後著梨原解紐放警終夜醉遊狼藉及盗
人略又飯京至不眠寺く邊之間又獨盗人略
又後著狩衣指貫許飯奈良攻工度淀一度略
又於奈良後預録之後於不退寺前二作詩略
是ハ奈良後服着も別々あり又依保川の尻考のたり
平家四倍も自給よし。又老がさうり。七千人かり。後
ニテ所の乃どり切。かひも。さうりも。引てまらうり
さうりも。平家あり。二子小分つてらる向くと時
。西方寺西の頃の内。不浄の地と。さうり。永禄三度申年。松永
。彈正眉間寺山。孫誠郭と。早門山。大化の地と。西方寺。知
。依保山。眉間寺の。前。西南へ。流。と。依保川と。云。未。又。さ
。ら。川と。云。古。平。初。獨。あり。俗。況。松。永。氏。祭。の。乃。と。採。一。た
。と。非。と。う。早。く。滅。亡。と。と。

○若宮御殿 天神也。今と。名。改。要。集。子。何。り。統。れ。と。も。あ。り。

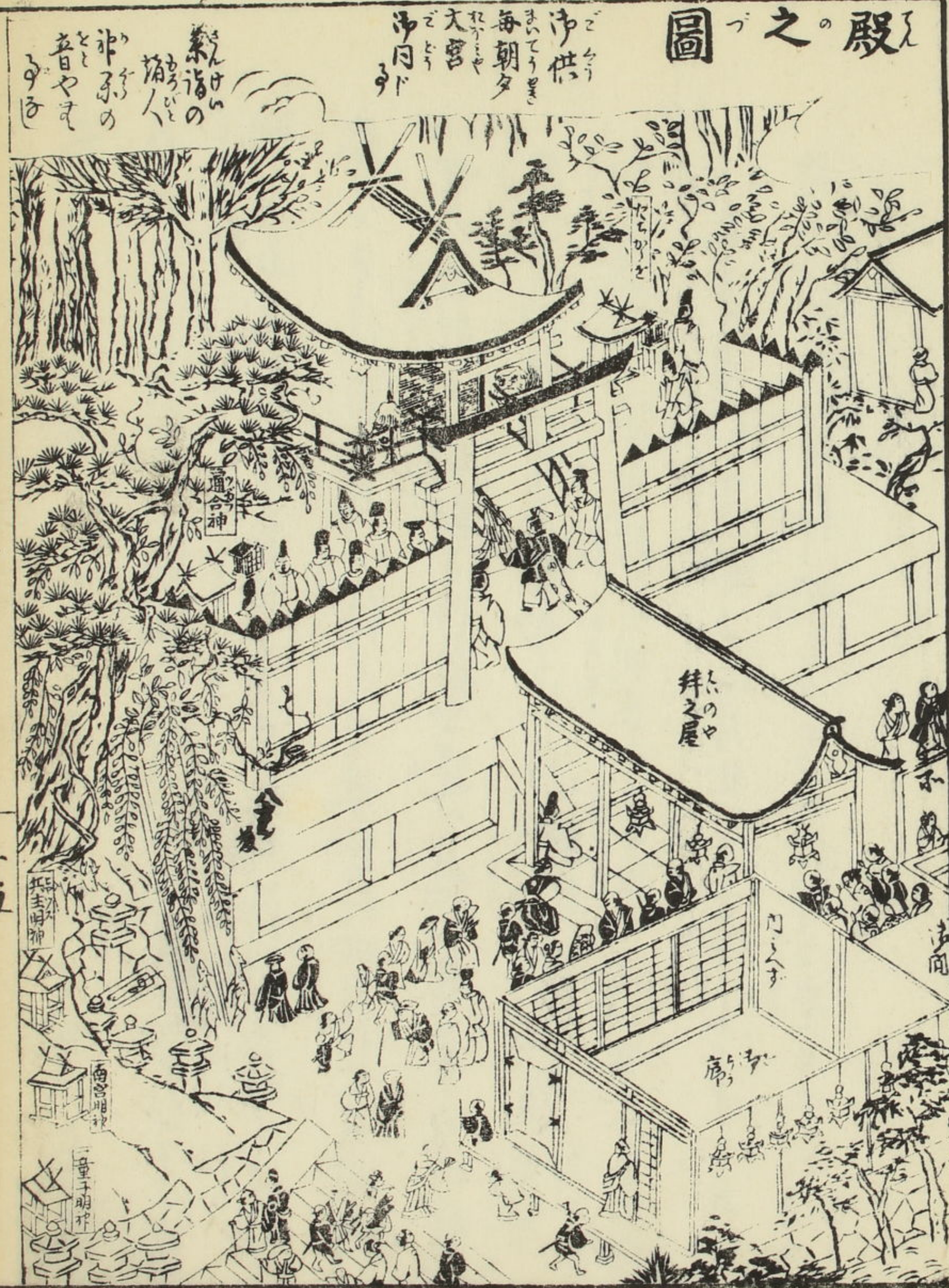
わかみやごえん
あまのとくものみこと
めいけうようし
あまのとくものみこと

若宮御



春日宮御神祇略記

殿之圖



御供
毎朝夕
大宮
御月
新嘗の
祭りの
神楽の
音やま
り

若文社主一家の秘説より知る事あり。長保五年二月三日。二之代御殿の圖ふ。何より事と。長保五年三月時風五代の孫中臣連是忠之の御殿に。後一祝と奉り。その後百廿年と経て。長承四年四月廿七日。時風八世乃孫祐房。別殿に。御殿と建て。後一なる。今の御殿之内院に。小社二座あり。南小一座。雄社。北小一座。通合。抑通合社に。中臣祐房朝臣の並社に。祐房若宮と。後一奉りて。後。仁平二年十二月廿四日。卒して。廿七年。後。後。治承二年。神院ありて。通合社と崇め申也。春日記

